

数学という手段を使っ
て、実社会で生ずるいろ
いろな意思決定問題を解
決する手法を、OR(オ
ペレーションズ・リサー
チ)という。五〇年代の
アメリカで産声をあげ、
コンピューターの普及と
ともに大発展を遂げた学
問である。

それほど重宝な分野で
ありながら、数学の敷居
が高そうに見えるため
あって、よい入門書がな
いなあと思っていた。そ
んな矢先、初学者でもす
らすら読めてORの本質
がよくわかる、手頃で楽
しい入門書が現れた。
「キャンパスのOR」



橋爪大三郎が読む

「数理決定法入門」 今野浩著
(朝倉書店・2678円)

と副題をもつ本書は、大
学に入学したての一年生
が、身近に経験するさま
ざまな問題(たとえば、
下宿をどうやって決める
か、どの経路が通学に便
利か、親から毎月いくら
仕送りしてもらうか、ど
うやれば講義の出席点が
もらえるか、など)を、
うまく数式に表現してモ
デル化し、鮮やかに解決
してみせる。少なくとも
あるタイプの問題に関す
る限り、有無を言わせぬ
合理的な解決方法が存在
するということを、若い
学生諸君が学ぶことの意
義は大きい。

なお興味深いのは、本
書の手法の多くが、学生

諸君の提案によって改善
されたものであるという
こと。第一章「クラス編
成問題」は、第一、第三
志望までを記入した申告
票をもとに、なるべく大
勢の学生の希望を満たし
ながら、各組の人数制限
も考慮した公平な組分け
の方法を考えるという問
題。ここで、第一志望、
第三志望にどううまく点
数を割り振るかが、この
方法のミソである。「究
極のクラス編成」をめざ
し毎年知恵を絞っている
「工学部K教授」と理
工系学生諸君の少々オタ
ツキーな生憎に、読者
は思わず微笑んでしまっ
てしまう。

ORはいわゆる、
応用数学の分野に属
する。ひと筋なわで
は解決のつかない問
題に、うまく数学の
定規をあてはめ、少
しでもましな結果を
導くのが身の上だ。そ
れには、文学者や政
治家にも劣らない、
人間や社会に対する
深い洞察力を要す
る。著者今野氏の宿
願はそんな「理系文
系をまたにかける
「フリンジ」を
養成することなので
ある。

本書の利益は、
それにとどまらな
い。第七章「投票の理
論」は、「投票のパラド
ックス」の紹介から、社
会的選択理論の興味あ
かい興行きまでをスケッチ
する。お勤めは、認定投
票(不定数連記)。単純
多数決や決選投票方式に
比べ、格段に優れている
投票方法なのだ。なお著
者は、この方法が「わが
国ではまだどこかの組
織で正式に採用されたとい
う話は聞かない」と言
うが、私が理事を務めて
いる日本ボビュラー音楽
学会では一九九〇年六月
の理事選挙から早くも、
この投票方式を採用して
いることを、誇らしくつ
け加えておこう。

(はしづめ・だいさぶ
ろー)東京工大助教授

「イニシエーション」はあ
つ「成人式」と訳され
る。若者が一度はくぐら
なければならぬ試練の
機会、という意味であ
る。気鋭の宗教学者・島
田裕巳氏は、みずから
の体験をイニシエーシ
ョンの観点からとらえ直すこ
とに、宗教学の核心があ
るが、その理由は本書を
読めば明らかになる。

島田氏にとって、宗教
学は、自らの魂の歩みそ
のものにほかならなかつ
た。《世間知らずで、言
われたことをそのまま鵜
呑みにしてしまう》まだ
精神的に子供だった《



橋爪大三郎が読む

「イニシエーションとしての宗教学」
島田裕巳著
(筑摩書房・1250円)

(二九六)氏は、まず
高校で新左翼の学生運動
にもまれ、それがもろく
も退潮したあと、大学の
講義で「イニシエーシ
ョン」という言葉を知る。
それは《魔法のことば
だった。すべてが分析
できるのではないかとさ
え思えた(九六)。こ
の魅力に取り憑かれ、氏
は宗教学科へ進学する。
イニシエーションには
導きの師がいる。著者
にとってそれは、講義の主
・柳川啓二教授(宗教
学)だった。本書の前半
は、故人となった教授の
持ち味豊かな講義の模様
を再録し、教授への心あ
ふれるオマージュとなっ
ている。私も柳川教授の

講義につられ、宗教学へ
の転科を考えたことがあ
るので、とてもなつかし
い思いがした。
柳川教授は安保闘争が
「お祭り」にすぎないこ
とを看破し、日本土着の
信仰をフィールドにした
という。彼の宗教学は、
大学闘争が「祝祭」の構
造をそなえていたことの
不思議を解き明かすかに
思われ、私を含む当時の
多くの学生たちに感銘を
与えた。

島田氏は、それにとど
まらない。柳川教授の指
導のもと、山岸会を調査
するうち、ヤマジズム
に魅かれて入信してしま
う。一年足らずで矛盾
を感じ会を離れたもの
の、この体験は氏の宗
教学の原点となった。
自らの宗教的体験を客
観化する作業が、氏の
場合、宗教学そのもの
と重なるほかはない。
どちらがイニシエーシ
ョンの構造をもちから
である。

幸福の科学やオウム
真理教のような、時代
を象徴する新しい宗教
が出てくるたびに、も
っとも突っこんだ分析
を見せられる氏の、
力量の秘密がここにあ
る。子どもの頃から慣
れ親しんだ世界の亀裂
と偽りに気付いたとき、
若者は宗教に走り出る。
そして、宗教もまたひと
つの体制にすぎないこと
を思い知ったとき、宗教
を離れる。この信と不
信を揺れ動く心の力学
に、氏の関心は集中す
る。それは成熟のため、
誰もが通らなければなら
ない道筋なのだ。
宗教学は、《信する》
ことの構造を説明するこ
とを焦点とする。それに
は、《信じる》ことの内
／外に身を置かねばなら
ない。宗教学を自らのイ
ニシエーションとして引
き受けることが、まさに
それなのだ。

(はしづめ・だいさぶ
ろー)東京工大助教授

本書がイギリスで発売されたのは去年の六月。チャールズ皇太子との不仲がここまでとはと、世界中が大騒ぎになった。だが本書は、決してスキヤンダラスな暴露本ではない。……一人前の女性になる前に皇太子妃となつてしまった少女が、逆境のなかでほんとうの自分を発見していく物語なのである。

著者A・モートンはベテランの王室担当記者。長年にわたる関係者へのインタビューを通じて本書を書きあげた。ダイアナ妃周辺の取材が充実しているので、一方的に事

生きる自信が持てるまでの避けられないプロセスだった。立ち直りのきつかけは、王室の伝統である慈善活動。彼女は施設の慰問に喜びを見出す。自分も傷ついた彼女だからこそ、自然な優しさで振るまえるのだった。去年の暮れ、ダイアナ妃は正式に別居したが、今年わが国では、皇太子妃内定のニュースが飛び込んできた。小和田雅子さんは多くの点でダイアナ妃と対照的だが、特別な家柄に嫁ぐという苦勞は共通していると言えるかもしれない。

本書を読んで痛感するのは、王室(皇室)をめぐるジャーナリズムのあり方の違いである。

イギリスにも大衆に迎合する夕刊紙や、猛烈な取材合戦がある。しかしその一方で、王室を率直に論評する伝統があり、「自粛」と無縁の歯に衣着せぬ語り方ができる。この伝統は、なかなか健全なものだと思ふ。

王室や皇室といった近代以前の制度が現代に生きながらえていけば、いろいろな矛盾もある。もちろんそれなりの理由があって、そうした制度は存続しているの

実をねじまげているのではないかと、億測を生んだが、むしろそれは、ダイアナの苦悩を見かねた友人たちが進んで口を開いたことによるものだという。十分な裏付けのある信頼すべきドキュメンタリーの読後感である。私が個人的に興味をひかれたのは、ダイアナ妃が結婚直後から重い過食症にかかっていたこと。「ちょっと太めだね」というチャールズの心ないひと言がきっかけで、この病との戦いは十年あまりに及ぶ。それは、学業もばつとせず、人目につかない少女だったダイアナ妃が、自我を確立し、

だが、これが憲法のもとで機能するには、残りの部分が近代社会の原則できちんとして動いていることが大切だ。英国の王室の場合、統廃するスキヤンダルは成熟した市民社会と王室の旧弊とのあつれきだとも言えよう。わが国の場合、皇室が市民として成熟に向かっているのに、政府や国民のほうからむしろ過去の幻影に囚われているとも言える。スキヤンダルがないからと言って、手放しで喜べない。そんな折人間サイズで問題を考えるべきだという原点を、本書は指示してくれた。た。 (はしづめ・だいさぶろう) 東工大助教授

橋爪大三郎が読む

「ダイアナ妃の真実」

アンドリュー・モートン著 入江真佐子訳
(早川書房・2000円)

pp. 45 ジップ企画出版



▲講談社/1,300円

社会がわかる本

橋爪大三郎 著

「社会」ってまじまじ考えると手に負えないくらい広いし、頭にも負えないくらい難しい。でも、この本の著者は社会学の助教授さん。プロ中のプロが、学校を卒業してしまっただけなのに、この本は全5章から成っているが、社会オ

独断の 閲覧室

ンチらしく、一番目をつけたのは第5章の「おんなである知恵、生きる知恵」の。男も女も結婚難。いい男性の見つけ方。である。ほとんど女性週刊誌を読むノリで入ったが、なぜか違和感なくデータと共にきちんと現状が理解できるのには驚く。一つのテーマが、6ページで完結しているのも読み易く、当初は自分の関心あるテーマだけを、とびとびに読んでいたが、どんどん深みにはまり、よし、郭小平の中国なんぞも読んでみるか」となる。オンチでも、社会ってもんが分かったような気分って、なかなかイイ。

「ワタシ、分かんないわーい」じゃなく、社会人の本棚に1冊はあってもいい本だ。

岩波講座 現代思想全16巻 刊行案内リーフレット

岩波書店 (1993. 4.)

● 思索の森に分け入る若者へ 橋爪大三郎

わが国の哲学・思想界も、欧米の動向を追いつけたあとようやく、独自の問題群を掘り下げる独創と成熟の段階に達しつつある。そんな期待がふくらむラインナップだ。20世紀の知的潮流をバランスよくカヴァーし、社会問題とも切り結ぶ鋭い論客を多く配した布陣。初めて思索の森に分け入ろうとする若い読者に、特に勧めたい。

(東京工業大学助教授)

1993-14-3/6

産経新聞 1993. 4. 15. 日刊 18177号 朝刊13面

橋爪大三郎が読む

「信長と天皇—中世的権威に挑む霸王」
今谷明著 (講談社現代新書・1096円)



日本の天皇はなぜ万世一系なのか。この疑問を裏返せば、天皇の権威に正面から挑戦する日本人がなぜ現れないのか、となる。そしてその数少ない例外があるとすれば、まず織田信長だろう。

『室町王権』(中公新書)で將軍足利義満の「王権覇奪(さんだつ)計画」を大胆に推論し話題をよんだ今谷明氏が、今度は信長と天皇の関係をとり上げたとなれば、これは必読である。関連史料を丹念に点検し、正親町天皇と信長のやりとりを時系列に従って再構成していく緊迫感に、一気に読み終えた。

信長は天下を統一したあと、天皇をどうするつもりだったのか。この疑問は歴史のイフだが、徳川三百年をどう理解するか、の核心に関わる。古くからの信長勤皇説と、新説(天皇を抹殺したかった)の間を検証すべく、今谷氏は考察を進める。

信長は、中世的な秩序の破壊者。伝統や古来の特権に挑戦し、絶対的権力を確立しようとした。それに対して天皇は、伝統的な秩序の中心に位置する。そして当時、朝敵だった大内義興が入浴し、後柏原天皇を免責して以来、戦国大名が天皇の政治責任を免責する「象徴天皇制」が確立していたと、今谷氏はみる。

有名な京の馬揃えは、正親町天皇に対する退位の強要であった。それに失敗した信長は、武田討伐のあと將軍位を要求した。事態をこう解する今谷氏は、信長も足利氏同様に、天皇は信長の切り札のひとつだった。信長が存命中、天皇と決定的な対立に至らなかったのは、天皇をまだ利用できると考えたからではないか。かりに將軍位を要求したのが事実としても、それが信長の最終構想だったかどうかはわからない。

信長が安土に寺を建て自分を神とあがめさせた話の解釈も気になる。今谷氏は、信長は自分の神格化に失敗したとし、皇族まで自らへの祈禱に参加させていた足利義満政権のほうがかつと安定していたとのべる。しかし「自らへの祈禱」と「自己の神格化」とでは次元が違ふ。挫折したとはいえず、「絶対権力」に最も近づいた信長は、天皇を超える可能性を秘めていたと言えないだろうか。

それはともかく、史料に埋もれ本筋を見失いがちな歴史学界にあって、心強い仕事であった。(はしづめ・だいさぶろう)東京工大助教授

産経新聞 1993. 5. 20. 日刊 18211号 朝刊16面

橋爪大三郎が読む

「状況と態度」
ジョン・パーワイズ、ジョン・ペリー著
土屋俊他訳 (産業図書・4326円)



待ちに待った、それこそ待ちに待った翻訳の登場だ。一九八三年に出版されたパーワイズ&ペリーの『状況と態度』は、状況意味論・状況理論の古典としてあまりに有名である。この書物は、ケインズの『一般理論』やチョムスキーの『文法の構造』と同じように、オリジナルであるだけに難解だが、汲めどもつきぬアイデアの宝庫として、長く読みつがれていくのは間違いない。

翻訳の計画があることを知ってから、私はずっと待っていた。『遅滞の責任の大半は、訳語、文法の統一を引き受けた土屋俊にある』という。恨みごとのひとつも言いたい。この難物を訳した苦労は察するに余る。それに私はうっかりして、去年の十月に出たのを知らず、実は買ってきたばかりだ。まだ読んでいないが、なに、土屋俊氏の訳なら素晴らしいに決まっている。これで、専門家やもの好きだけでなく、ずっと広い範囲の人びとが本書を読めるようになったことを喜ぶたい。

この本を、五年くらい前に英語で読んだ。面白かったが、正直言って閉口した。概念が錯綜しているつえに、適当な日本語に置き換えてみると、三分の二のところで挫折していた。

それでも私がこの本に期待するのは、それが、状況を初めて正面から扱った仕事だから。言語を行使して生きている人間とその世界のあり様を、厳密に数理的にモデル化しようという最初の有望な試みだからだ。それに

これは、社会学に使えそう。どう使えようかは職業上の秘密だから、詳しい話はできないが、そういう直感が働いて、私は必ずしも居ても立ってもいられない気持ちになる。さあ、いよいよこの分野における研究において、日本の研究集団が無視できない存在になっっている。その成果がスピンオフして、社会学をはじめとする隣接領域に新しい刺激を与えることを期待したい。

コンピュータは、人間の自然言語を処理できないため、未完成な機械にとどまっている。状況理論は、このネックを突破し、機械と人間のインタフェースの問題を最終的に解決しようとするものだ。人間の思考を、ほんのこの意味でコンピュータがアシストする。これがどれだけ大きな発展の余地を人類にもたらすか、容易に想像がつくであろう。このスリリングなテーマをめぐる、哲学、数学、言語学、論理学、計数工学、心理学、社会学といったさまざまな学問が、境界を越え、手をたずさえて発展できるようになるのなら、素晴らしいことである。(はしづめ・だいさぶろう)東京工大助教授

語に置き換えようとしてなかなかうまくいかなかった。それに、状況理論がその後ヴァーノン・アッブを続け、本書の用語法や記号系は旧くなくなってしまったと聞けば、丹念にフォローしようという気もなえてしまう。よっ

本書はわが国で初めて書かれた、シク教の本格的な研究書である。シク教の信者はインドのパンジャブ州を中心に千四百万人あまり。人口比で二％にすぎないが「インドのユダヤ人」とも言われ、近代化に果たした役割は大きい。シク教と聞けばわが国ではガンジー首相を暗殺した過激派というイメージしかないが、著者は、イスラム教とヒンドゥー教を止揚するシク教本来の教えの骨格を、インド文明の文脈の中で平易に説明している。

本書のもっとも重大な仮説は、シク教と大乗仏教のつながりを指摘している点である。どちらもカースト制の不条理を乗り越えるために在家主義を掲げ、現実社会の改革を目指した。のみならず、大乗教徒はイスラム教に改宗してインドで姿を消したというのが著者の推定であるから、両者は系譜関係によってもつながっていることになる。

シク教の開祖ナナクは十五・十六世紀の人。イスラムもヒンドゥーも同じ神のもとにあるとする彼の教えは、以後十代にわたるクル（教主）に受け継がれた。十一代の唐西域記によるよりず

橋爪大三郎が読む

「シク教の教えと文化——大乗仏教の興亡との比較」
保坂俊司著（平河出版社・2800円）



本書はわが国で初めて書かれた、シク教の本格的な研究書である。シク教の信者はインドのパンジャブ州を中心に千四百万人あまり。人口比で二％にすぎないが「インドのユダヤ人」とも言われ、近代化に果たした役割は大きい。シク教と聞けばわが国ではガンジー首相を暗殺した過激派というイメージしかないが、著者は、イスラム教とヒンドゥー教を止揚するシク教本来の教えの骨格を、インド文明の文脈の中で平易に説明している。

本書のもっとも重大な仮説は、シク教と大乗仏教のつながりを指摘している点である。どちらもカースト制の不条理を乗り越えるために在家主義を掲げ、現実社会の改革を目指した。のみならず、大乗教徒はイスラム教に改宗してインドで姿を消したというのが著者の推定であるから、両者は系譜関係によってもつながっていることになる。

シク教の開祖ナナクは十五・十六世紀の人。イスラムもヒンドゥーも同じ神のもとにあるとする彼の教えは、以後十代にわたるクル（教主）に受け継がれた。十一代の唐西域記によるよりず

本書の大部分を執筆した小林賢氏は、日本興業銀行調査部長などを歴任した専門家であり、七九年以降中国側と頻りに接し、その系統的な研究を怠ってきつたこと、イスラム教、ユダヤ教のごく基本的な文脈にふれることがない。わが国では、キリスト教の研究に比べて、お寒い状況である。本書の著者は、そうした現状に対する抗議の声を聞くように思った。やがて中国を追い抜き、人口世界一になる日も近いインドとインド文明の真実の姿を理解するための、最低限の補助線を与える本書が、多くの読者に受け入れられるように願ってやまない。

（はしづめ・だいさぶろう「東工大助教授」）

橋爪大三郎が読む

「中国——高成長経済への挑戦」
小林賢、呉敬璉編著
（日本経済新聞社・2000円）



中国の経済改革は、農村から始まった。人民公社を解体し、個人経営を復活したことで、農民の生産意欲は増大し、郷鎮企業（農村工業）の大発展をみた。第二段階は、深圳をはじめとする経済特区・沿海地域の工業発展である。国外からの華

・経済制度を整備して、アジアNIEs各国みただけの経済発展の履行体制を、中国国内にうまく立ちあげさせるのが課題である。そのための具体的な提案が本書に盛り込まれている。中国経済についてよくある誤解は、中国が貧しいという点。人民元が過小評価されているのを補正すれば、統計の三倍程度の実収入があることが妥当だ。また外資への依存度は、かなり低い。八九年ごろからの供給力過剰を受け、民衆の貯蓄率はきわめて高く、それが高成長の原動力となっている。国営企業の合理化をはかると同時に、サービス部門の強化をはかり、就業機会を創出すること。長期資金を社会資本の充実に振り向ける金融機構を整備すること。人民元の交換性を回復すること。これらはどれも、社会主義市場経済の死体を制する重要な提言である。日中文化の違いを十分わきまを置いて、中国市場の将来性を真剣に考慮して、共存共栄のための道を今こそ真剣にさぐってほしい。小林氏の日本企業への苦言も傾聴に値する。

（はしづめ・だいさぶろう「東工大助教授」）

「忘れられた人々」と題するこの写真集は、その名にふさわしく、忘れがたい印象を残すものにみつけられる。ある者は鎖につなわれ、ある者は家族に去られ、ある者は入院の費用もない。中国で精神を病む人びととその家族が、医療や社会から見放されて二重、三重の苦悩を背負わされている現状を、カメラがきつりと直視する。

△病院から病院への旅路で……自問した、……何を探しているのだ。苦難を偏愛する癖でもなければ、不正を告発するだけでもない。私を引き寄せたのは……精神病患者たちの人間としての尊厳、その粘り強い生の意志だ（まえがき）。馬小虎氏は、何かの直感から、カメラマンとしての最初の対象を、精神を病む人びとに選んだ。それは期せずして、中国の現代化にとどまらず、人間存在の根源を照らした大きな仕事になった。

馬小虎氏は三十歳と、まだ若い。北京の高校卒業後、待業の数々を経て暗室作業員となり、カメラを学ぶ始める。八八年に退職、借金とカメラを背に、まる二年かけて全国三十八の精神病院を回

橋爪大三郎が読む

「忘れられた人々——中国精神病人的生存状況」
馬小虎著／李丹訳（第三書館・3399円）



どの国でもそうだが、精神病患者と家族は、病気のほかに、社会の偏見や経済的困難ともたかわなければならぬ。中国の場合は特に、全国で一千二百六十万人と言われる患者に対し病床は八万と少なく、しかも大部分は人里離れた場所にある。

（はしづめ・だいさぶろう「東工大助教授」）

入る。経済的な理由などで入院すらできず、家族の崩壊、流浪生活、横死といった悲惨なケースも少なくないという。ふつうの人びとがとりたてて関心を持たない社会の底辺に、事実存在する人びとの実像から目をむけたいこと。本書は、高度成長にわたるこの社会の基盤が、どれだけ揺らぐものかを気付かせてくれる。

文化大革命の混乱の十年の最中、多くの人がびとが精神に異常をきたし、身体に障害を負った。そうした人びとは傷の癒えないまま、どの横町にもどる村里にもひっそりと生きている。改革開放政策の下、国営企業の合理化や国家保障の大幅カットが避けがたいのだとすれば、そのしわ寄せをまっ先に被るのがこうした人びとでないのか。「社会問題」などないといわれていた国に、社会調査が興り、報道の自由が芽生えつつある。職も収入もなげうって、誰も目を向けない部分にレンズを向けたこの若いカメラマンに、私は信頼を覚えた。九二年からは中国農村のキリスト教を求めて旅立ったというが、その第二作も大いに期待したい。

中曽根、サッチャー、レーガン。八〇年代を特色づける新保守主義は、わが国でも行政改革・民営化の大きな流れをうんだ。本書は、国鉄・電電公社・専売公社の民営化プロセスの全体像を、初めて詳細に記述・分析した研究書である。

鈴木内閣のもと、行政管理庁長官に就任した中曽根康弘氏は、一九八一年早々、土光敏夫氏を会長とする臨時行政調査会（第二臨調）をスタートさせる。「増税なき財政再建」を旗印に、土光臨調は国鉄の分割民営化、電電公社のNTTへの移行など、ドラスティックな改革をなしとげた。その事実経過を究明にあたり、条件が揃えば「日本政治の自己改革能力」が発揮されるのかを考察しようというのが、本書である。

八〇年代は、政治の制度傾向が極まった時代だったと著者は言う。自民党の長期政権のもとと野党の役割分担が固定し、国会審議が形式化した。自民党が実質的な立法機能を担い、派閥や族議員が大きな権力を握った。だが、微細な利害調整が制度化すればするほど、根本的な改革はでき

橋爪大三郎が読む

「民営化の政治過程——臨調型改革の成果と限界」
飯尾潤著
（東京大学出版会・4635円）



像をあまり出さず、意思決定プロセスの裏面に迫る膨大なデータを時系列に整理したのが第一部。改革を成功させた要因を評価・分析したのが第二部、の構成である。

事実関係を再構成した第一部が、今後この問題を考えるスタンダードな

資料となるのは間違いない。だが、それにも増して興味深く思えるのは、民営化の国際比較を試みている第二部だ。日本では赤字だから民営化するのに対して、イギリスでは黒字だから民営化するのが基本であるという。なるほどと違いがわかる。また最近、中国では国営企業の合理化を進めるため、日本の行政改革（特に国鉄の分割民営化）に関心が高まっている。本書が中国語に訳されたら、極めて重宝されるはずだ。民営化を誰が構想しよう実現するか国際的な比較をもちつて行えば、有益な知見が多くえられると思う。

臨調の成功はまた、限界でもあった。著者が指摘するのは、臨調の権力が八〇年代という「時代状況・政治状況」によって作られたものであること。△日本の政府・政治を改革し、時代の変化に合わせるという点については失敗した」とする。折から自民党政権が解体して、八〇年代には起こりえなかった政治改革・構造変革の時代が始まった。本書の手法で「九〇年代の政治過程」を考察する続編を望みたい。

（はしづめ・だいさぶろう「東工大助教授」）

1993-14-5/6

恋愛論

竹田 青嗣著

△恋愛は、それを生きているとき
はどんな不思議もないひとつの体験
だ、その本質を言い当てることは
と際立った謎として現れる(一頁)
○頁。その謎を、著者は全力で解
きあかそうとする。
本書のあちこちで、ああこれは自
分も思い当たるふしがあると感じる
個所に、読
者はぶつか
るだろう。
すべての恋愛は似通った構造をもっ
ているからだ、それ以上で著者が、
そうした構造の深いところまで分け
入っているからだ。
恋愛論は、自分の体験を賭けて語
らなければ空しい。が、自分の体験
をつきつめて客観化できなければ成
功しない。著者は議論の素材に、ゲ
ーテやスタンダーなど西欧近代の
代表的な恋愛小説を選んだ。本書恋
愛論は、だから、「恋愛小説論」で
もある。そのうえで著者は、恋愛の
プロセスを支配する法則ないし仮説
をいくつか提案する。恋人の美、プ
ラトニズムとエロティシズムの融
合、絶対感情、愛のルール、エロス
の自己中心性、などがそこでのキー
ワードだ。
著者はプラトン、フロイト、バタ
イユ、フーコーなどを踏まえ、オー
ソドックスな議論を展開する。
幼児はみな自己中心的だが、やが
て挫折し、青年期の自己ロマン化の
段階に進む。そうした困難な日常の
たたなで、恋愛のエロティックな
ときめきは△「徹底的な自己中心性

小説論から愛の法則を模索

最後に疑問もつけ加えておく。著
者の議論は
十分普遍的
だと思っ
るが、素材に西欧のロマンティック
ラブを扱っている分、キリスト教文
明でしか妥当しないロジックを追っ
かけている部分もあるように思う。
日本社会での恋愛は、本書の分析と
まったく同型なのか。日本の小説を
素材にした模索を期待したい。(作
品社・一、六〇〇円)
東京工業大学助教授 橋爪 大三郎

マクロ社会学

金子勇・長谷川公一著
社会変動と時代診断の科学
本書は、停滞するフロンティア
を切り拓こうとする意欲にあ
ふれた、著者の野心的な試
みである。
著者はまず、△今日の社
会学の理論的研究の現状は
△戦前からの伝統である外国
の社会学説の紹介、△いよ
うに細分化された専門性
への閉塞(一頁)以外のな
にもでもない、という診断
を下す。この現状を乗り越え
るべく△何よりも時代の骨太
い見取り図を提示する(二頁)
(一頁)をわけて、△「時
代診断」の観点からの社会変
動研究(一頁)を試みたの
が本書である。
△△、新世代に向かう時
代を象徴するキーワードは
……おへん一のかたち
は絞られて、複数のものに
なる(一頁)と、著者は
は言っている。そこで△時代を正確
に理解する
で重要とされる
る複数のテー
マを提示し、……
キーワードは
た。それは、産業化、都市化、
官僚制、流動性、情報化、
国際化、高齢化、福祉化、計
画化、というところから
選ばれる。△△(一頁)これ
選ばれる。△△(一頁)これ

停滞するフロンティアを切り拓 こうとする意欲にあふれた試み

橋爪 大三郎

学術 思想

生もの、そして著者の相互の
フィードバックは、テーマの
拡がりや資料の選択を厚み
あるものに、本書の質を高
めている。「かくかくしかじ
かの変動が、過去に現在に
ある」という情報を、デー
タに即して説得的に伝える書
物、すなわち「時代診断」の
書という著者のねらいは、
達せられている。
そのうえで、欲張った注文
をつけるなら、これが「マク
ロ社会学」なのだろうか。
第一章「マクロ社会学の理
論」を書いた長谷川氏も相当
意識しているように、「マク
ロ社会学」を名のものは、然
る。マクロ社会学と比較され
る。マクロ社会学は、国民
所得や経済的傾向、利子率
といったマクロ変数を用いて
国民経済(一)国の市場全体)
のモデルをこしらえ、それを
相互関係をスケッチする。
は、病理学な
の基礎医学に
当る。社会
についての一般
な命題を用意

時代の見取り図を提示

北大学で本書の内容を講義し
た。それは、産業化、都市化、
官僚制、流動性、情報化、
国際化、高齢化、福祉化、計
画化、というところから
選ばれる。△△(一頁)これ
選ばれる。△△(一頁)これ

『広告批評』166号 1993年11月号 pp. 24 マドラ出版

「なるほど、ベント」の力学

「再生紙を使用しています」とわざ
と印刷してある名刺をもらったとき
のような居心地悪さを感じさせたら、
環境広告は失敗だ。
裸の若い母親と赤ん坊。山奥のうっ
そうとした森。スクラップ自動車の山。
それだけが映し出されると、何かメッ
セージがあるはずだ、と人は思う。そ
こで、メルセデス・ベンツ。なるほど、
と人はうなずく。
——のではあるが、その力学はかな
り微妙だ。単純な映像ほど、文脈次第
であべこべに読める。二番煎じや二流

橋爪 大三郎

企業と思われたのでは、単なる「くさ
い」広告になってしまう。
こういう広告を打てる会社は、だか
ら、そのへんの力学も研究してGOサ
インを出した(「自信があった」とい
う意味になる。そんなメタ・メッセー
ジも伝わるから、さすがベント、の感
が強い。これはパブルの構造と同じ
だ。あとはやることをやって、広告に
恥じない会社であるための努力の日々
が続くのみ。これもベントらしい、と
言っておこう。

私の書評

「社会がわかる本」
橋爪大三郎著

主婦 青木敦子 40
(山梨県都留市)
私は子供のころからとく
に社会科が苦手で、大人に
なってもテレビのニュー
スや新聞の活字は頭の中
を素通りするだけだった。
しかし、このところの世
界の変革から、日本も深く
かわっていることを漠然
とだか感じてきた。その一
方で、日本がこの世界情勢
のなか、どのようにかわ
り対処すべきかわからな
い。政治、経済、地理、歴
史……。すべてにうとく、理
解したくても糸口が見つ
からないのだ。
そんなとき、本書に出合
った。とても分かりやす
く、今まで見聞きしてきた
情報の一片が頭の片隅から
はがれてジグソーパズルの
ようにまとまった。おかげ
で衆院選挙の大切さもよく
分かり、政治の大切さを知
った私は、新しい日本に期
待して投票することができ
た。社会とは、政治や経済
が同時に流れているもの
だ、と実感させられた。
(講談社・一三〇〇円)



A5判・347頁・3296円
新曜社

攻。九大大学院博士課程
位取得退学。著書に「ロ
ミニエの社会学」(都
市高齢社会と地域福祉)
など。一九九四(昭和
六十九)年生。
★はせがわ・こういち氏は
東北大学助教授・社会学専
攻。東大大学院博士課程
位取得退学。共著に「新
幹線公署」「ジェンダーの
社会学」など。一九五四(昭
和二十九)年生。

上野千鶴子、江原由美子をはじめとする多くの人がこの努力によって、八〇年代、日本のフェミニズムは議論を深め、実力を蓄えた。その言説は広く行きわたった。しかし、フェミニズムの思想は、どのような社会が男性と女性にとっても平等な社会であるのかという問いに究極的には答えていない」と著者は言う。本書は「平等な社会」について、一つの明確なイメージを浮かび上がらせようとする（まえがき）。

著者は、六〇年代に登場したラディカル・フェミニズムが、画期的だったとする。ラディカル・フェミニズムは、性差別が、社会制度よりも男女の個人的な関係そのもののうちに潜むとした。性関係が性差別を再生産すると考えると、ベシズムに行き着く。女でありながら差別をのがれる道はなくなるからだ。

制度的な平等を追求してきたフェミニズムは、ラディカル・フェミニズムの洗礼を受けたあと、運動の実践的な課題をみつづけるのが難しくなっている。これが著者の言う「フェミニズムの困難」だ。著者は、ふつうの女性がこの困難を引き受け

橋爪大三郎が読む

「フェミニズムの困難——
どういった社会が平等な社会か」
吉澤夏子著（勁草書房・2369円）



て生きるにはどうすればいいかを探究する。本書を読んで快いのは著者・吉澤氏の硬質で透徹した文体である。感情の流れる文章のあやに溺れないで微妙な問題を書き分けようとする志向が一貫している。八〇年代フェミニズムに「遅れて

力によって序列づけられるというもう一つの差別を被る差別の二重化」。著者は高校時代、少女が大学に入ると、必死になつてノートをとるか、爪を磨くか、どちらかになる」と聞いて、とっさにどちらにもなりたくないと思った（あとがき）という。その初心は「少女性である」ということも「個性」のきらめきの一つなのだ、ということ

音楽は国境のないことばであるという。だがうらはらに、日本人は自分たちの好みにあわせて、独自の流行音楽の世界を築いてきた。そんな戦後五十一年の音楽シーンの厚みを、著者小川博司氏はフィールドとする。ここであつかりあうのは、欧米発のポップスと土着の感性、テレビやMTVなど国際的なメディア・ネットワークとローカルで自己中心的な欲望だ。さらに、日本語という言葉の壁。幾重にも折り重なったヒットチャートから、著者は日本人の集合的心的のダイナミズムを解説していく。

たとえば、女声デュオ・アイドルの系譜。ザ・ピーナッツ、ピンクレディ、うしろゆびさされ組（おニャン子クラブ）、Winkへと変遷は、異界からの使者が次第に欲望の対象に変容してゆき、最後にアイドルの消滅（誰でもがアイドルになれる時代）を迎えるという、消費社会の成熟と並行している。またたとえば、日本ポピュラー音楽史のなかの「沖縄」。仲宗根実樹、南沙織、喜納昌吉とチャンプルーズ、りんけんバンドへの流れは、「東京と地方を結ぶ流行歌」の遅れた波に

橋爪大三郎が読む

「メディア時代の音楽と社会」
小川博司著
（音楽之友社・2200円）



すぎなかつたものが、アメリカ的なもの、さらにアジア的なものの窓口へと、ベクトルをシフトさせていく過程でもある。一人ひとりの嗜好の集積にすぎないはずの流行音楽の変遷から、このように正確に集合心理の底流を計測することができるのだ。

本書の大部分は、雑誌「教育音楽」に連載した文章が元になっている。主に中学・高校で音楽を教える教師を対象にした雑誌だ。これまで音楽教育を支配してきた「西洋芸術音楽至上主義」と、ウォークマン少女、バンド青年の集まりである生

徒の音感や音文化とは、絶望的に隔たってしまった。そのあいだで悪戦苦闘する教師たちを応援することも、本書のねらいのひとつである。ロック、ジャズ、歌謡曲、演歌、CMソング……。西洋芸術音楽の正統からはずれたこれらの音楽は、これまで、どれほどわれわれの心を占めていようと、まことに議論する価値がないと考えられてきた。が、事情は変わりつつある。世界でも、日本でもポピュラー音楽学会が組織され、一九九七年の世界大会が金沢で開かれることも決まった（本書あとがき）。わが国はソフトの売り上げから見て、世界第二位のポピュラー音楽大国だ。ウォークマン、カラオケといった世界商品の発祥地でもある。しかし、そうした日本の音楽文化の実態は、これまでほとんど世界に知られていなかった。本書にカラオケについて一章をもうけた著者は、近くカラオケについての本格的な研究をまとめる予定という。それが世界へのメッセージとなるよう、期待して待たたい。（はしづめ・だいざぶろう）東工大助教授